

「津久井やまゆり園障害者殺傷事件」から5年

7.26 声明

2016年7月26日、19人もの尊い生命が奪われ、26人が重軽症を負わされた「津久井やまゆり園障害者殺傷事件」が発生して今日で5年を迎える。発生当時、戦後最大の被害者を生んだ凶悪事件として多くの人々を震撼させたあの悲劇は事件の直接の被害者及びその関係者の方々、そしてわれわれ障害当事者にとって依然として過去のものではない。しかし、この5年という歳月は事件を社会の記憶から遠くの方へ押し流してしまった。

昨年3月31日、事件の犯人である植松被告に対して死刑が確定した。裁判の結審とともに事件は報道及び社会的風潮として急速に過去のものとして認識、取り扱われるようになった。当該裁判は初公判からわずか3ヶ月あまりという異例の速さで判決が下され、その間裁判の焦点は薬物使用における被告個人の責任能力の有無に終始絞られた。そのために、被告があのような凶行に及んだ真の動機の解明、当初は職員として熱心に施設入居者の身の回りの支援にあっていた若者が「重度障害者は不幸しか生まない」という極端な優生思想の考えに転ずるに至るまでの経緯において職場環境または社会的背景に存在する差別構造がいかに作用を及ぼしたかについて、その証言の裏側にまで稔密な検証がなされることは最後までなく、遺族やその他傍聴人は被告の聞くに堪えない上っ面の妄言に切齒扼腕しつつただ耳を傾けることしかできなかった。

事件現場跡地には本年7月4日、亡くなられた方々の慰霊のモニュメントとともに新たな入居施設が完成した。それに前後し、相模原市は今年に開催が延期された東京パラリンピック採火イベントの会場に同地を選択した。この決定について本村賢太郎市長は3月29日の記者会見で「誰ひとり取り残すことのない共生社会実現への誓いを込めて実施したい」という旨の説明を述べたが、凄惨な殺戮現場を華々しい祭典の会場として使用することへの激しい違和感を覚えるとともに、事件はすでに過去のもの、乗り越えられるべきものであるという意識の表れのように思われた。さらには、この過程において事件被害者及び遺族の方々の意向や思いは一切省みられることはなかったという事実が明るみとなり、結果的に事件遺族、全国の障害当事者の多くの反発、要望を受け神奈川県と相模原市は同決定を撤回する事態となった。本件においては改めて障害当事者であるわれわれと神奈川県及び相模原市との事件に対する認識のギャップが浮き彫りとなったと同時に、県一丸となって進めると言われる共生社会の実現に向けた取り組みへの姿勢についても真に当事者目線に立ったものであるのか懐疑的な目を向けざるを得ない。

黒岩祐治知事は7月20日、新たに再建された津久井やまゆり園での追悼式典の場で、「障害者の社会参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除する『ともに生きる社会かながわ』の実現に向けた歩みを揺るぎなく進める」と述べ、また「新しい津久井やまゆ

り園は地域移行を前提とした施設で、終の棲家ではない」という発言もしている。世界では脱施設、大規模施設の解体の流れが進んでいる。5年前の事件で被害にあわれたほとんどは自らの希望で施設への入所を選択したわけではなく、地域で生活する上での周囲の理解、社会的資源を十分に手にすることができなかったためにやむなくそこでの暮らしを余儀なくされた方々である。自ら望んでいなかった場所で被害にあうこととなってしまった方々の無念と向き合い、真の共生社会の実現を目指すためにも脱施設へ向けた抜本的な意識改革、重度訪問介護等の福祉サービス利用の充実、拡充も含めた総合的な支援体制の見直しが迅速に求められる。あわせて、ひとりひとりの障害当事者のニーズに適った円滑な地域移行を進めるには現在の介助者不足の解消なくしては実現が困難である。そのためにも、実際に現場で介助にあたる人材の十分な確保、育成に向けた取り組みもより一層強化されなければならない。

事件から5年がたった今も依然として障害者入所施設での虐待事例は後を絶たない。地域との日常的な交流が断たれた閉鎖空間の中で安全や保護の名のもとに何の疑問も持たれないまま虐待や暴力にエスカレートしていくという構造は現在の形の施設運営が続く限り温存されていくだろう。その原因を、全て虐待を行った個人の狂暴性に還元しているだけでは何の根本的な解決にならないことは今のわれわれにとって火を見るよりも明らかである。死刑判決が下されてから1年、被告の口からはもう直接事件の真相を聞き出す機会は失われた。それとともに、社会もまた事件を振り返る機会を失っていくだろう。このままでは再びあのような惨劇が起きてしまうような気がしてならない。元来、社会に根強く植え付けられてきた優生思想に則った人間観はすべての人に生きづらさを与えながらも未だわれわれの生活の至る所に息づいている。今一度、あの事件が引き起こされた社会的要因、背後に巣食う偏見や差別、優生思想の問題と真っ向から向き合い、是正していくことが必要である。

事件発生から5度目の夏を迎える今日、私たちは、改めて事件被害者の方々に深く哀悼の意を示すとともに、事件の風化を阻止し、障害によって分け隔てられないインクルーシブ社会の実現を目指して行動していくことを誓う。そして、社会のあらゆる人々に、ともに考え行動していくことを強く期待する。

2021年7月26日

自立生活センター 自立の魂 ～略して じりたま！～

代表 磯部 浩司